情報理工学部講義収録システム LecRec の運用について

２０２５年4月1日

情報理工学部では，学内数ヶ所の講義教室に講義収録用専用装置･カメラ装置を設置し，これらを活用して専門講義科目の教室内の映像音声を収録･配信できるシステム（愛称：LecRec）を運用しています．本システムにより，学生の皆さんは，病欠した授業の補充学習，或いは，講義内容の復習･定着などを目的として，収録済みの講義映像･音声（以下，収録コンテンツと略記）に学内･自宅からネットワークを介してアクセスする事が可能となります．以下，本システムの運用と利用について説明します．

１．講義収録システムの位置づけ・意味について

本システムは，教室講義の黒板映像，書画カメラ，教卓 PC 画面，教室マイク音声を自動収録した映像･音声について，ネットワーク配信を通じて受講生が事後視聴する事により以下の効果を目指すものです．

1) 反復学習により講義内容の高水準な定着
2) 病気など止むを得ない欠席に対する補充学習機会の提供

尚，収録コンテンツは授業の代替物ではなく，あくまでも学習効果を高めるための補助に過ぎません．従って，収録コンテンツの事後視聴により授業欠席が正当化されるものではありません．

２．収録対象となる講義について

現在のところ，収録機器設備が設置された講義教室は SR407, 12502, 10201, 14102, 14103 だけです．また，収録対象となる講義科目は，これらの教室にて行われる情報理工学部（コンピュータ理工学部）専門科目のうち，担当教員が許諾したものに限られます．

３．収録コンテンツへのアクセスと利用について

収録コンテンツは担当教員のチェックを経た後にネットワークアクセス可能な状態になります．基本的に Mac/Windows パソコンや iPad などで標準的なブラウザソフトウェアにて視聴できます．各講義コンテンツへのアクセスは，本学学習支援システム moodle 上の各授業コースページ上にアクセスリンクが設けられますので，そちらからアクセスしてください．従って，受講登録学生でなければ当該科目の収録コンテンツにはアクセスできません．

全ての収録コンテンツは著作権法に基づく著作物であり，皆さんの「学習のために視聴する事を目的とするアクセスのみ」が許諾されます．したがって，収録コンテンツの一切全てについて担当教員及び本学の許諾なく無断で記録・複製・配布などの行為を一切禁じます．

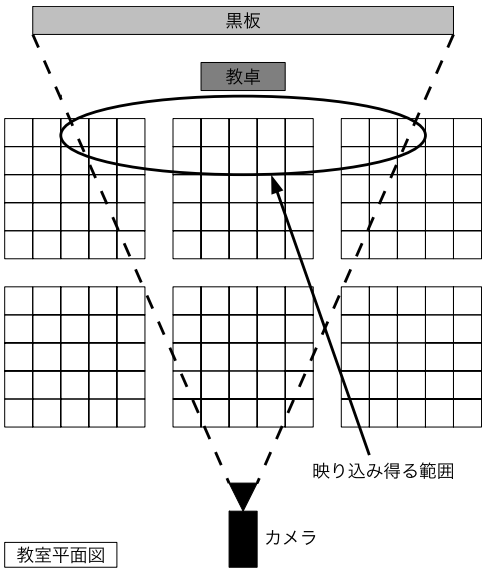
また，本システムはパブリッククラウドサービス上で稼働しています．そのため，過度にアクセスが集中すると円滑に視聴できない状況になる可能性は常にあります．そのような場合には，利用時間帯を変えてみるなどの自己対応にて対処頂くことになります．また，定期試験前にはアクセスが殺到して過大なサーバ負荷となって正常に視聴できない可能性もあり得ます．充分な時間的或いは時期的余裕を持って利用してください．

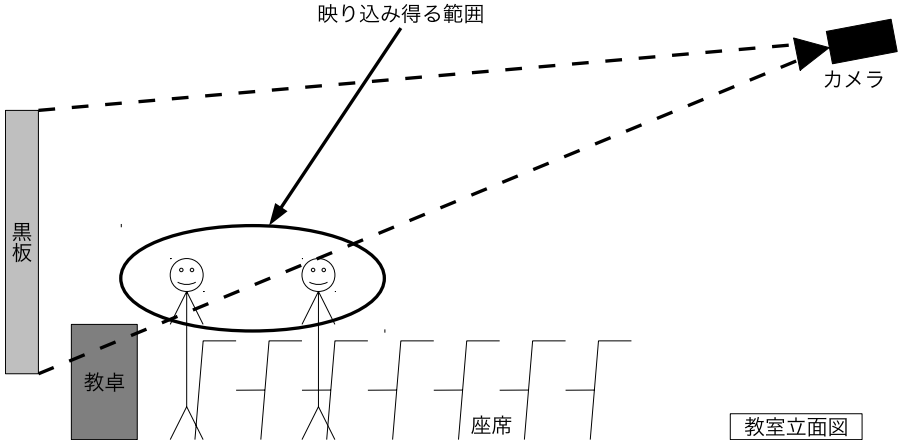
尚，2025 年度 LecRec については極めて不本意ながら情報センターの都合（つまり我々に人柱になれということ）によりバックエンドシステムが Panopto へ置き換わっており，使い勝手が以前とはかなり異なりますので注意してください．

４．講義収録における受講生の映像・音声の映り込みについて

本システムでは，教室黒板上の板書を教室後方に設置したビデオカメラにて撮影します．そのため，黒板とカメラの位置関係の都合上，授業時間中に黒板の前を横切る様子や黒板直前に着座している受講生の後頭部などが収録映像に若干映り込んでしまうことが避けられません．（下記の教室平面図，及び，教室立面図を参照）

各受講生は，その止むを得ない映り込みを了承する事を条件として各受講講義の収録コンテンツを事後視聴できるものとします．





尚，この映り込みを避けたい方は，カメラ撮影範囲を考慮の上で着席するようにして下さい．また，音声については，教室マイクで収録された音声のみが収録されますので，もし授業中に教員からマイクを向けられた場合，自分の肉声が収録される事が嫌ならばマイク使用を拒否してください．

さらに，ネットワーク視聴可能になった収録コンテンツにおいて個人が特定できる状態で自分が撮影されている事が明らかであり，その該当箇所の削除を特に希望する場合には，講義担当教員にその旨を申し出て頂ければ，できる限りの配慮を行います．但し，後ろ姿や後頭部など個人特定ができない場合は，その限りではありません．（法令上，後ろ姿には肖像権は発生しません．）

それでも尚，万が一にも自分の姿が映像収録される可能性を完全に排除したい場合は，別途，担当教員に申し出て下さい．その場合には当該講義の受講生全員が収録コンテンツにアクセスできなくなる事と引き換えに当該講義の収録自体を一切行わない措置を取る事になります．

以上

文責
京都産業大学情報理工学部　大本英徹